



- I. 研修科の長 根本 哲 生
- II. 臨床研修責任者 根本 哲 生
- III. 臨床研修指導医数（厚生労働省認定） 3名

IV. 認定医数・専門医数・指導医数

日本病理学会病理専門医	2名
病理専門医研修指導医	2名
日本臨床細胞学会専門医	2名

V. 主な診療実績

病理組織診断	9,010件
細胞診	5,478件
術中迅速診断	207件
病理解剖	23件

VI. 診療科の特徴

病理診断は、多くの疾患において治療方針の決定に必須の情報となっている。当科は臨床チームの一員として、生検・手術材料の病理診断および細胞診断を行っている。また不幸にして死の帰転をとられた患者の剖検（病理解剖）を行い、生前に付された臨床診断や治療の妥当性をはじめとする、臨床上の疑問点に答えるよう努めている。当科では、将来病理診断医を目指す方はもちろん、病理診断がどのように行われるのか知っておきたい、臨床病態や画像の理解を深めたい、研究手法として病理を経験しておきたいといった様々な希望を持った研修医に対して、広く門戸を開いている。内科・外科問わず、どの分野に進むにしても、病理の経験は無駄にはならない。

- (1) 年間約 9,000 件の病理組織診断、5,500 件の細胞診断が行われており、人体全般の臓器・疾患につき豊富な症例がある。
- (2) 規模に比して比較的多数の剖検が行われている。またほぼ全例を Clinico-pathological conference; CPC（臨床病理検討会）にて検討している。CPC には多数の研修医が参加し、活発な討論が行われている。
- (3) 科内で電子カルテも参照できるため、臨床像と総合した症例の検討が容易である。

VII. 研修目標（学修目標）

A. 医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）

- 1. 社会的使命と公衆衛生への寄与
社会的使命を自覚し、説明責任を果たしつつ、限りある資源や社会の変遷に配慮した公正な医療の提供及び公衆衛生の向上に努める。
- 2. 利他的な態度
患者の苦痛や不安の軽減と福利の向上を最優先し、患者の価値観や自己決定権を尊重する。
- 3. 人間性の尊重
患者や家族の多様な価値観、感情、知識に配慮し、尊敬の念と思いやりの心を持って接する。



もくじ. 自らを高める姿勢

自らの言動及び医療の内容を省察し、常に資質・能力の向上に努める。

B. 資質・能力（学修到達目標）

1. 医学・医療における倫理性

診療、研究に関する倫理的な問題を認識し、適切に行動する。

- ① 人間の尊厳を守り、生命の不可侵性を尊重する。
- ② 患者のプライバシーに配慮し、守秘義務を果たす。
- ③ 倫理的ジレンマを認識し、相互尊重に基づき対応する。
- ④ 利益相反を認識し、管理方針に準拠して対応する。
- ⑤ 診療、研究、教育の透明性を確保し、不正行為の防止に努める。

2. 医学知識と問題対応能力

最新の病理診断学および関連する基礎・臨床医学に関する知識を獲得し、自らが直面する診療上の問題について、科学的根拠に経験を加味して解決を図る。

- ① 病理標本の作製過程を理解する
- ② 各臓器の正常の形態（肉眼・組織）を学ぶ
- ③ 頻度の高い疾患について、病理形態を学び、所見および病理診断を記載する。適切な鑑別診断を列挙する。
- ④ 代表的な疾患について、確定診断のために必要な免疫染色を理解する。

3. 診療技能（と患者ケア）

肉眼観察・顕微鏡観察（鏡見）に先立ち、臨床情報を収集、理解する。

- ① 肉眼的に対象臓器を観察し、所見を記載する。
- ② 臨床から求められている検索希望事項を理解し、必要十分な組織学的観察を行うための、サンプリングを行う（切出し）。
- ③ 組織学的に標本を観察し所見を記載、鑑別診断を挙げた上で、病理組織学的診断を付す。
- ④ 病理診断報告書を、適切かつ遅滞なく作成する。
- ⑤ 業務の内容上、直接患者と対応することはないため、「患者ケア」は研修対象外である。

4. コミュニケーション能力

当科では患者や家族への対応は行わない。病理医や臨床医、コメディカルと良好な関係性を築くことは大変重要である。

- ① 適切な言葉遣い、礼儀正しい態度、身だしなみで他人に接する。
- ② 必要な情報を整理し、分かりやすい言葉で説明する。

5. チーム医療の実践

病理医師、臨床各科医師、コメディカルなど全ての人々の役割を理解し、連携を図る。

- ① 適切な病理診断を行うために、組織やチームの目的、チームの各構成員の役割を理解する。
- ② チームの各構成員と情報を共有し、連携を図る。

6. 医療の質と安全の管理

患者にとって良質かつ安全な医療を提供し、医療従事者の安全性にも配慮する。

- ① 医療の質と患者安全の重要性を理解し、それらの評価・改善に努める。
- ② 日常業務の一環として、報告・連絡・相談を実践する。
- ③ 検体取り違えなど、医療事故等の予防と事後の対応を行う。
- ④ 医療従事者の健康管理（切出しや剖検中の事故への対応を含む。）を理解し、自らの健康管理に



もくじ

努める。

7. 社会における医療の実践

病理の社会的重要性を踏まえ、各種医療制度・システムを理解する。

- ① 病理が医療にどのように貢献しているかを理解する。
- ② 解剖に関する法律の基本を理解し、病理解剖の役割、法医解剖・系統解剖との違いを説明できるようにする。

8. 科学的探究

医学及び医療における科学的アプローチを理解し、研究を通じて、自己の科学的思考力を養い、さらには医学及び医療の発展に寄与。

- ① 診断上の疑問点を研究課題に変換する。
- ② 病理学的研究方法（形態学、免疫組織化学、分子生物学）を理解し、活用する。
- ③ 臨床研究や治験の意義を理解し、協力する。

9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢

医療の質の向上のために省察し、他の医師・医療者と共に研鑽しながら、後進の育成にも携わり、生涯にわたって自律的に学び続ける。

- ① 急速に変化・発展する医学知識・技術の吸収に努める。
- ② 同僚、後輩、医師以外の医療職と互いに教え、学びあう。
- ③ 国内外の政策や医学及び医療の最新動向（ゲノム医療等を含む。）を把握する。

10. 当科特有の目標

医療における病理診断の役割を理解し、「病理が分かる臨床医」を目指す。

- ① 疾患についての臨床診断から治療前病理診断、治療後の評価としての病理診断という一連の流れを経験する。
- ② 指導医の指導の下、代表的疾患の切り出しができる。
- ③ 指導医の指導の下、代表的疾患については、自ら病理所見を抽出し、病理報告書原案が作成できる。
- ④ 臨床画像(放射線、内視鏡画像など)と病理所見を関連付けて考えることができる。
- ⑤ 各種疾患の病理診断を通し、疾患の病理総論的な捉え方ができる。
- ⑥ 指導医の指導の下、病理解剖に参加する。剖検の一部の介助、所見のまとめ方を経験する。

C. 基本的診療業務

コンサルテーションや指導医の指導が可能な状況下で、以下の各領域において、単独で診療ができる。

- ① 切り出し
頻度の高い疾患について、適切な切り出しができる。
- ② 病理診断報告書原案作成
頻度の高い疾患において、自ら顕微鏡所見を観察・記載し、病理診断を付した病理診断報告書の原案を作成する。その後、指導医と共に鏡見し、指導を受ける。

VIII. 研修方略

1. 当科で経験できる疾病、病態、その他

生検・手術が行われる全ての病態・疾患（ほとんどすべての臨床科にわたる）。

剖検が行われる全ての病態。



もくじ. 基本的診療業務

- ① 病理診断室における病理診断（顕微鏡診断）
- ② 切り出し室における切り出し業務
- ③ 剖検（依頼があった場合随時）
- ④ 学部学生に対する指導
- ⑤ 各種カンファレンス（CPC 毎月第3火曜 17時、臨床各科とのカンファレンス随時）
- ⑥ 病理標本作製過程の見学
- ⑦ 週間予定

	午 前	午 後	備 考
月	手術検体の切り出し、生検材料の鏡検 迅速診断	手術材料の鏡検、細胞診 迅速診断	
火	手術検体の切り出し、生検材料の鏡検 迅速診断	手術材料の鏡検、細胞診 迅速診断	CPC 第3週
水	手術検体の切り出し、生検材料の鏡検 迅速診断	手術材料の鏡検、細胞診 迅速診断、胸部疾患検体の切り出し	
木	手術検体の切り出し、生検材料の鏡検 迅速診断	手術材料の鏡検、細胞診 迅速診断、胸部疾患検体の切り出し	
金	手術検体の切り出し、生検材料の鏡検 迅速診断	手術材料の鏡検、細胞診 迅速診断	
土	予備日	予備日	

3. その他

研修内容は研修者の希望に応じて適宜組み立てることが可能である。

4. 当直

なし。

IX. 研修評価

研修目標の達成度については、診療科ローテーション終了時に研修医評価票Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを用いて、自己評価および指導医・メディカルスタッフによる評価を行う。（EPOC2 使用）

また、研修医評価票は研修管理委員会に提出され、半年に 1 回、形成的評価（フィードバック）を行う。